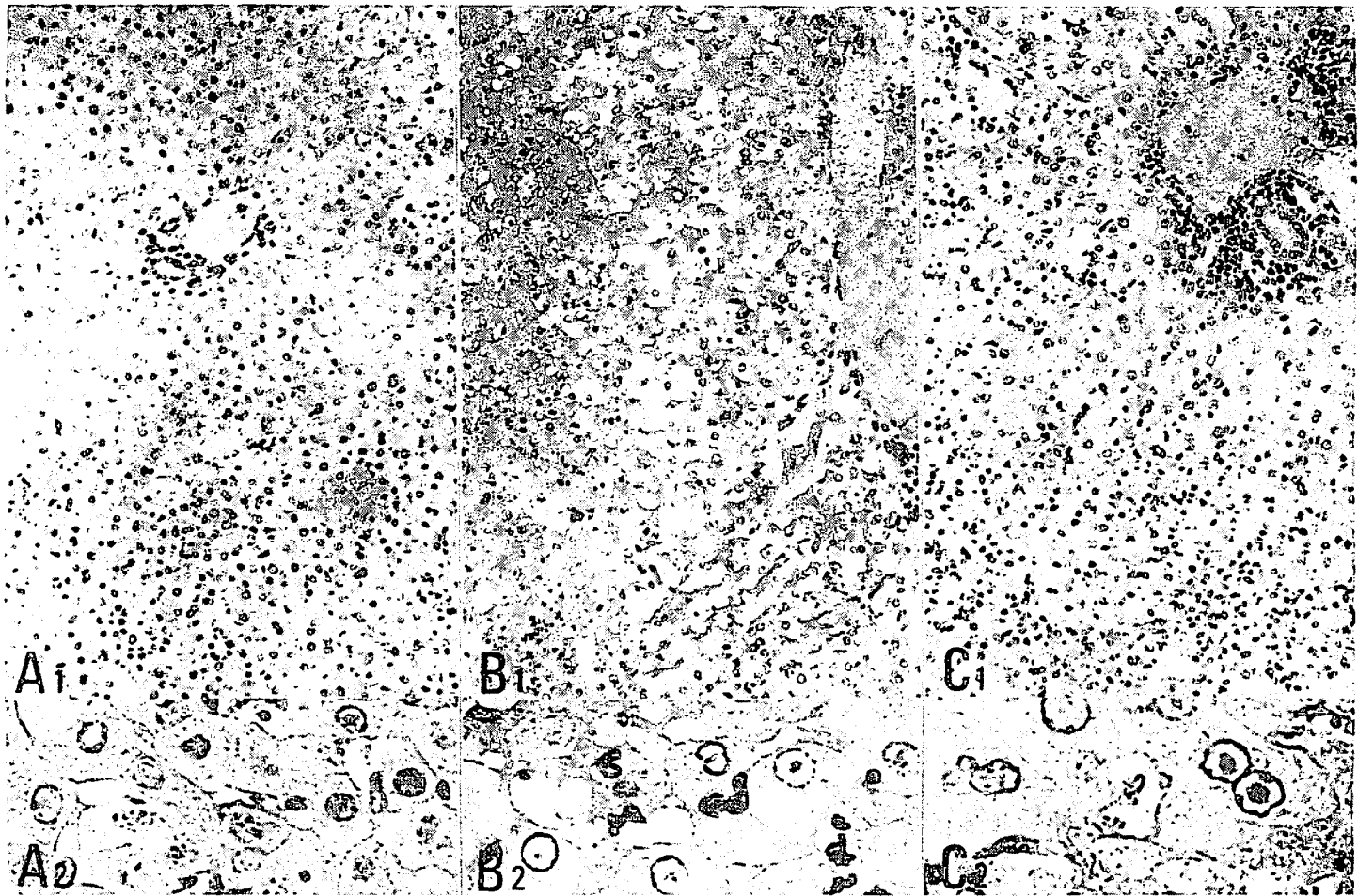


馬鼻肺炎ウイルス Ky-D 株によるハムスターの肝炎

北里研究所付属家畜衛生研究所出題 第17回獣医病理学研修会標本No.262



馬鼻肺炎ウイルス Ky-D 株はハムスターに高い感染性をもつ。本ウイルスの原液 ($10^{8.6}$ LD₅₀/ml), ならびにこれを 10^{-6} および 10^{-9} に稀釈したものを夫々ハムスターの腹腔内に 1 頭あたり 0.5 ml ずつ接種した。提出標本 (A, B, C) はこれら感染ハムスターの肝臓であって、原液を接種したのち 30 時間 (A), 10^{-6} 稀釈ウイルスを接種したのち 80 時間 (B) の死亡例, および 10^{-9} 稀釈ウイルスの接種後 120 時間に軽い発病を示した際に剖検した例 (C) である。

標本 A では小葉辺縁の少領域を除き肝細胞は一様に好酸性変性を呈し, 好中球浸潤, 細網内皮系の活性化および小葉間における少数の円形細胞および組織球の浸潤も見られる。核内封入体は殆どどの肝細胞に形成され, 好酸性変性を示す領域では好塩基性の核を満たす封入体が, また小葉辺縁では好酸性の核膜との間に明量を有する封入体が主体をなす。核膜は厚く塊状に断裂してみえる (写真 A 1, A 2)。

標本 B では小葉中心乃至中間帯の肝細胞の殆どが脱落し, うっ血・出血が著明である。細胞脱落領域には好塩基性封入体をもつ壊死性の裸核, 好中球および少数の

細網内皮系の細胞もみられる。小葉辺縁の肝細胞索は配列を乱し, 顆粒状および水腫性変性を呈する。核内封入体は残存した肝細胞の殆どに認められるが, その大多数は小型で核膜との間に広い明量をもつ。時折空虚に見える核もある。核膜の塊状断裂像は見られない。(写真 B 1, B 2)。

標本 C では標本 A, B に比し少領域の小葉中心乃至中間帯の壊死・脱落があり, 軽い出血を伴なう。同領域を中心に細網内皮系の動員が著明で, 本標本ではグリソン鞘の円形細胞および組織球浸潤が目立つ。胆管の増生もみられる。封入体は標本 A, B に比べて少数で, 主に壊死・脱落巣の周囲にみられる。封入体の染色性および形態が多様である (写真 C 1, C 2)。

電顕的観察によれば, 標本 A の核内封入体は顆粒状物質と多数の未熟型粒子を含み, 細胞外に成熟型粒子が多数存在する。これに反して, 標本 B, C では核内および細胞外ともにウイルス粒子数少なく, 核内封入体は未熟型粒子, 顆粒状物質以外に線維状, 円筒状構造物などをしばしば含んでいた。